はらはらとけい

腹腹時計

都市ゲリラ兵士の読本　VOL. 1

東アジア反日武装戦線"狼"

訂　正

3ページの「4」の1行目、5行目、

「流民」を「流動的労働者」に。

目　次

はじめに

今日、日帝本国に於いて、日帝を打倒せんと既に戦闘を開始しつつある武闘派の同志諸君と、戦闘の開始を決意しつつある潜在的同志諸君に対して、東アジア反日武装戦線"狼"は「兵士読本 Vol.1」を送る。これは、武闘派同志諸君と共に東アジア反日武装戦線へ合流し、その強化をめざす為のものである。

「兵士読本 Vol.1」は、同志個人と武闘組織などに直接送られたが、潜在的同志諸君にも読まれるべく、特定の書店、出版社、救対組織などへも郵送された。従って、この関係の方々にあっては、可能な限りこれを公表されんことを切望する。

さて、「兵士読本 Vol.1」は、東アジア反日武装戦線"狼"がこれまで自分たちの手で研究、開発、実験し、爆弾闘争を闘った経験を今の段階で総括するものであり、今後更に深化すべきものをその内容としている。即ち、日帝本国に於いて武装闘争＝都市ゲリラ戦を開始するにあたって最低限守らねばならないこと、最低限獲得し、習熟しなければならない諸技術、極く初歩の戦闘に於ける確認すべき原則などを今迄の"狼"の経験より提出し、同志諸君に点検、検討されるべきものである。

日帝本国に於いて、連合赤軍の敗北に至る多くの武闘組織の全員逮捕、武装解除という事態と、爆弾すら作り得ず使用できない観念「武闘」派の存在、爆発しない＝武器足り得ない「爆弾」作りの存在。それはわれわれに、武装闘争＝都市ゲリラ戦の基本原則、初歩的技術の獲得を再度確認、実践することを要求している。即ち、それは、日帝本国に於ける非合法、地下活動の問題であり、思想性の点検の問題であり、爆弾の行使などをはじめとする戦略的、戦術的な把え返しの問題である。

さて、「兵士読本 Vol.1」は前述の如く"狼"の経験の現時点での総括である。過去われわれはいくつかの非合法関係文書、爆弾のテキストを共有し、大いに参考にしてきた。「バラの詩」、「ゲリラ戦教程」、「栄養分析表」、「新しいビタミン療法」など。しかしこれらのテキストは、われわれが今日実際にそのまま活用するには、いくつかの問題をはらんでいるものでもある。先ず一つには、それらが発行され、それらの発行を促進した時代、状況と、

われわれが生きている今とでは大きな違いがあること。従って、時代、状況の違いをどの様に克服して読み取り、実際の力に転化していくのかという課題があること。次に、爆弾＝武器は一つ間違うと、製造者、使用者とも危険にさらしてしまうものであるにもかかわらず、それらのテキストを復刻、翻訳紹介した人たちがどれ程確信をもって（つまり実験などを繰り返して）いたのか疑問だということである。

“狼”は、あくまでもわれわれの現状より問題を提示したいと思う。そして少なくとも爆弾の製造に関しては、確信をもって提示することができる。

“狼”は、現在いくつかの爆弾「事件」によって治安警察から「追求」されているが、致命的な捜査資料は残していない。そして次の「事件」の準備を着々と進めている。それを今迄保障してきたのが、「兵士読本 Vol.1」の内容の実践的適用であった。同志諸君の中で大いに検討され、これを踏み台として更に飛躍されんことを期待する。爆弾の製造とそれの行使に関する基本準備は万全となるはずである。

なお“狼”としても、基本的準備、基本原則を踏まえての更なる飛躍、高度なテクニックなどを、これ以後連続的に送る「兵士読本 Vol.2」、「兵士読本 Vol.3」によって展開、提示するつもりである。

さて、以下に東アジア反日武装戦線“狼”はいくつかの問題を提起し、日帝打倒を志す同志諸君と、その確認を共有したいと思う。

1　日帝は、36年間に及ぶ朝鮮の侵略、植民地支配を始めとして、台湾、中国大陸、東南アジア等も侵略、支配し、「国内」植民地として、アイヌ・モシリ、沖縄を同化、吸収してきた。われわれはその日本帝国主義者の子孫であり、敗戦後開始された日帝の新植民地主義侵略、支配を、許容、黙認し、旧日本帝国主義者の官僚群、資本家共を再び生き返らせた帝国主義本国人である。これは厳然たる事実であり、すべての問題はこの確認より始めなくてはならない。

2　日帝は、その「繁栄と成長」の主要な源泉を、植民地人民の血と累々たる屍の上に求め、更なる収奪と犠牲を強制している。そうであるが故に、帝国主義本国人であるわれわれは「平和で安全で豊かな小市民生活」を保障されているのだ。

日帝本国に於ける労働者の「闘い」＝賃上げ、待遇改善要求などは、

植民地人民からの更なる収奪、犠牲を要求し、日帝を強化、補足する反革命労働運動である。

海外技術協力とか称されて出向く「経済的、技術的、文化的」派遣員も、妓生を買いに韓国へ「旅行」する観光客も、すべて第一級の日帝侵略者である。

日帝本国の労働者、市民は植民地人民と日常不断に敵対する帝国主義者、侵略者である。

3　日帝の手足となって無自覚に侵略に荷担する日帝労働者が、自らの帝国主義的、反革命的、小市民的利害と生活を破壊、解体することなしに、「日本プロレタリアートの階級的独裁」とか「暴力革命」とかを例えどれ程唱えても、それは全くのペテンである。自らの生活を揺ぎない前提として把え、自らの利害を更に追求するための「革命」などは、全くの帝国主義的反革命である。一度、植民地に於いて、反日帝闘争が、日帝資産の没収と日帝侵略者への攻撃を開始すると、日帝労働者は、日帝の利益擁護＝自らの小市民生活の安定、の隊列を組織することになる。

4　日帝本国に於いて唯一根底的に闘っているのは、流民＝日雇労働者である。彼らは、完全に使い捨て、消耗品として強制され、機能付けられている。安価で、使い捨て可能な、何時でも犠牲にできる労働者として強制され、生活のあらゆる分野で徹底的なピンハネを強いられている。そうであるが故に、それを見抜いた流民＝日雇労働者の闘いは、釜ヶ崎、山谷、寿町に見られる如く、日常不断であり、妥協がない闘いであり、小市民労働者のそれとは真向から対決している。

5　日帝の侵略、植民地支配の野望に対して、多様な形態で反日帝闘争が組織されている。タイに於いては「日貨排斥運動」、「日本商品不買運動」という反日帝の闘いが導火線となり、タノム反革命軍事独裁政権を打倒した。韓国に於いても、学生を中心に反日帝、反朴の闘いが死を賭して闘われている。しかし、過去一切の歴史がそうであった様に、われわれはまたもや洞ヶ峠を決め込んでしまっている。ベトナム革命戦争の挫折とわれわれとの関係においても又然りである。日帝本国中枢に於けるベトナム革命戦争の展開ではなくて、「ベトナムに平和を」と叫んでしまう。米帝の反革命基地を黙認し、日帝のベトナム特需でわれわれも

腹を肥やしたのである。支援だとか連帯だとかを叫ぶばかりで、日帝本国中枢に於ける闘いを徹底的にさぼったのである。ベトナム革命戦争の挫折によって、批判されるべきは先ずわれわれ自身である。

6　われわれに課せられているのは、日帝を打倒する闘いを開始することである。法的にも、市民社会からも許容される「闘い」ではなくして、法と市民社会からはみ出す闘い＝非合法の闘い、を武装闘争として実体化することである。自らの逃避口＝安全弁を残すことなく、“身体を張って自らの反革命におとしまえをつける”ことである。反日帝武装闘争の攻撃的展開こそが、日帝本国人の唯一の緊急任務である。過日、地下潜行中の某人が公表した文章に見られる待機主義は否定しなくてはならない。

7　われわれは、アイヌ・モシリ、沖縄、朝鮮、台湾等を侵略、植民地化し、植民地人民の英雄的反日帝闘争を圧殺し続けてきた日帝の反革命侵略、植民史を「過去」のものとして清算する傾向に断固反対し、それを粉砕しなければならない。日帝の反革命は今もなお永々と続く現代史そのものである。そして、われわれは植民地人民の反日帝革命史を復権しなくてはならない。

われわれは、アイヌ人民（彼らがアイヌとして闘いを組織する時、日帝治安警察は、在日朝鮮人に対すると同様、外事課がその捜査を担当している。）沖縄人民、朝鮮人民、台湾人民の反日帝闘争に呼応し、彼らの闘いと合流するべく、反日帝の武装闘争を執ように闘う“狼”である。

われわれは、新旧帝国主義者＝軍国主義者、植民地主義者、帝国主義イデオローグ、同化主義者を抹殺し、新旧帝国主義、植民地主義企業への攻撃、財産の没収などを主要な任務とした“狼”である。

われわれは、東アジア反日武装戦線に志願し、その一翼を担う“狼”である。

第1章
武装闘争＝都市ゲリラ戦の開始に向けて

武装闘争を、大衆運動の自然的延長線上に構えてはならない。これは鉄則である。日帝本国に於ける、今迄の武闘派のあらゆる敗北は、これの無自覚ないしは軽視であったと断言できる。武装闘争＝都市ゲリラ戦は、自ら決意、志願し、自ら準備を始めることから出発する。

第1篇
個人的準備＝ゲリラ兵士としての配慮

ゲリラ兵士は、あらゆる面で肥大化した都市機能、雑踏を最大限に活用し、隠れみのとしなくてはならない。又、最大限の注意と配慮を構じなくてはならない。従って、ゲリラ兵士の出発の第一は、その条件を整えることにある。

1　左翼活動家であると思い込んでいる自分、又は他人よりそう思われている自分を、生活形態などを変えていくことに依って消していくこと。

①　居住地に於いて

◎　居住地に於いて、極端な秘密主義、閉鎖主義は、かえって墓穴

を掘る結果となる。

◎　表面上は、極く普通の生活人であることに徹すること。（そう思わせることだ。）

◎　生活時間を、表面上市民社会の時限内に復すること。（特に、時間の転倒には気を付けなくてはならない。）

◎　近所付き合いは、浅く、狭くが原則である。最底限、隣人との挨拶は不可欠である。

◎　居住処としてのアパートや下宿等に、多勢の人間の出入りがやたらに目立ち、深夜、明け方に及ぶヒソヒソ話が続くことは止めなくてはならない。

◎　居室に生活用品が全く無く、ポスター、ステッカー等が散乱、貼付してある状態は、絶対に止めなくてはならないし、形は整えなくてはならない。このことは、引っ越しの際など荷物が無いと大変目立つものだし、その事に依って人目を避け、コソコソと動き回る結果ともなる。

◎　居室は常に整理し、清潔を保つこと。名簿、住所録、手紙、手帳などは常日ごろ整理し抜き、必要に応じて暗号化すること。不必要なもの、在ることのまずいものは他に移すか、廃棄、焼却すること。

② 職場に於いて

◎　職場の選択の際、何故そこを選ぶのか明確にしておくこと。

◎　既に職場に居る場合は、同じく、何故現在この職場に居るのかを常に意識的にしておくこと。メンバーをオルグするためにか、その企業を内部から解体するためにか、ある特殊な技能、物資を得るためにか、単に生活費を稼ぎ出すためにか、それらのいずれにせよはっきりさせること。無節操にあれもこれもと手を出すべきではない。

◎　別に明確な目的を持たずに現在の職場に就いている場合、組合などで極左的に、原則的にゴリ押ししないこと。経営者はすぐにタレ込みをする。

◎　居住地、職場とも共通なことは、極端な秘密主義、閉鎖主義に陥らぬことと、左翼的粋がりを一切捨て去る、ということである。長髪で、ヒゲをたくわえ、米軍放出の戦闘服などを着た「武闘派」

がいるが、それは偽物であり、危険極まりない男であると判断すべきである。

2　ゲリラ兵士は、市民社会に自らの正体を知られてはならない。それは鉄則である。ところが、武闘派の諸君も、こと人間関係については全く無節操であり、下手である。今迄の武闘派の敗北の大半は、人間関係の失敗の結果といっても過言ではあるまい。

① 親、子、兄弟、妻、夫、友人などとの関係について

◎　家族との関係をことさらに絶つ必要はない。ベタベタする必要は全くないが、ある日突然連絡を絶つことは、余程の事情がない限り止めた方がいい。突然関係を絶つことに依って、かえって身動きのとれなくなる場合も起り得る。

◎　家族を抱き込むか、関係を絶つかという二者択一はする必要がない。「反戦、反安保」で共闘することとは根本的に異なるのだから、全面的な交通を保つことはできないのだ。われわれにとっての全面的交通とは同志関係のことである。従って、極く普通の家族関係があればいいのだ。

◎　市民社会での「友人」についても同様である。関係を絶つのがまずいのであれば、それをことさらにする必要はないが、われわれにしてみれば、その関係の必然性もまた全くないのである。関係があるといっても、家族同様、自身の真の姿を見せてはならず、それには全くタッチしない関係でなくてはならない。その友人が将来同志として共に闘う友人であるのか、何故に現在関係を有しているのか、厳密に検討すべきである。

② 合法的左翼との関係について

◎　職場に於いて、学校に於いて、居住地に於いて、彼らとの関係は原則的に厳禁である。彼らの圧倒的大部分は、徹底的に質が悪い。口も尻も軽すぎて、全く信用できぬ代表的部分である。

◎　彼らとの関係の中で、組織の拡大、強化などを考えるのは全くの幻想であるし、それを強行すれば、組織の解体にすらつながることになる。(ゲリラ兵士はオルグされて成長するものではない。)

③ マスコミ・トップ屋との関係について

◎ マスコミ・トップ屋との関係は、一切合財止めるべきである。「赤衛軍」とかのドジ踏みの例を引用するまでもないであろう。

◎ マスコミは商品として売り出さんがために、闘いの本質を歪曲し、隠蔽し、自らの論理で粉飾して流通機構にのせる。("狼" もコッテリと小ブル論理で粉飾された記事を書かれた経験がある。) それを意識的に日々遂行しているマスコミ関係者、評論家とか呼ばれる連中は、例えどれ程左翼的ポーズをとろうとも、それはポーズに過ぎない。奴らとの関係を持ってはならない。サツに売られて、奴らにしこたま稼がせる前に気付くことだ。

3 更にいくつかの基本的注意

◎ ゲリラ兵士は酒を飲まぬ。酒は平常心を失わせ、羽目をはずし、油断を生じ易くする。これは、ゲリラ兵士にとっての最大の敵である。特に、何人か集っての酒盛りは厳禁である。それは、合法左翼の専売特許であるべきだ。

◎ 喫茶店を使用するには、充分の配慮が要求される。特定の店を使用せぬこと。顔を覚えられてしまう。よく、団体で長時間、左翼系出版物を裸で携行し、ノートを広げて、学生活動家得意の用語を駆使して、口角泡を飛ばしているのに出っくわすが、あれはみっともないし、絶対にまずいので、われわれはそれをタブーとしなくてはならない。総じて、喫茶店の使用は注意すべきである。私服がゴロゴロしているし、過去、それに依って敗北した例も沢山あるのだから。

◎ 居室を製造所（工場）として使用する場合、深夜までキリキリ、カリカリ隣り近所に聞こえる様な作業をしない様注意すること。

◎ 健康の維持は、ゲリラ兵士個々人の任務であり、責任を持たねばならない。運動選手のような身体である必要は全くないが、闘いに要求される健康状態を常に保っていなければならない。肉体的消耗は、精神をも消耗させ、活動の停滞につながるものだ。日常的な点検と鍛練が必要である。

ゲリラ兵士は、同志以外との交通関係は極力少くし、市民社会に於いてもうまく立ち回って、自分の真の姿を見せないことが鉄則である。先にも触れたが、親、兄弟、妻、夫、子供、友人との関係に於いても、困難な問題を抱えるであろうが、原則は原則である。同志以外の人間に対する警戒と配慮は、例え肉親であっても同様である。重大な決意を必要とするかもしれないが、そこでもたついていてはゲリラ兵士にはなりきれない。

われわれは、自分の姿勢、生活形態、目的意志を点検、確認し、交通関係を整理し、自分の生活をすべて武装闘争に向けることに依って、最初の準備をし終えることになる。

第2篇

武装＝都市ゲリラ組織の基本形態

武装闘争を闘い抜くゲリラ兵士は、極めて詳細な専門的知識、経験、訓練を要求される。即ち、個々のゲリラ兵士の職人的熟練と正確さ、芸術家的情熱と創意工夫が要求されているのである。その個々の力を結合し、更に促進させるのが組織でなければならない。つまり、武装＝都市ゲリラ組織は、武装闘争を有効に、成功裡に展開するために、最大限の機能性を発揮するものでなければならない。常に攻撃性を主要に考えなくてはならないが、治安警察などの追求をかいくぐる配慮もまた、要求される。

1　任務の分担

◎　それぞれの組織の事情に依って、多様なやり方があるとは思うが、重要ないくつかの仕事については、その任務を分担すること。

（"狼"の場合は、武器、爆薬の製造・保管・財政・情報収集・通信連絡等に任務を分担している。）

一個人に集中的に過重な負担をかけてはならない。個々がその任務を受け持つことに依って、専門的て充分な力をつけることができるし、相互の任務を活発に、円滑に、計画的に進めることができる。そして、任務を分担することに依って、例えば一人が逮捕、戦死したとしても、組織全体に波及することはないし、ダメージを最小限に食い止めることができる。（その際の、任務の引継ぎに関しては、訓練の項で述べる。）

◎　任務の分担に関連して、アジト（集会、会議場、連絡ポイント）・武器庫・工場・前進（出撃）拠点は、絶対に一致してはならない。致させていると、一挙に解体される危険を生じ易い。連合赤軍（彼らは山の中ではあったが）の敗北を見るまでもないであろう。しかし、未だそれだけの準備と隊形を整えないでいる場合には、武器庫と工場とか、前進拠点を仮のアジトとするとかで、うまく組み合わせるとよい。しかし、武器庫や工場をアジトと一致させてはならない。

2　通信、連絡、符牒などの取り決め

◎　ゲリラ兵士一人一人は、組織名を持つべきである。日常、市民社会に於いて、われわれは本名と法的手続きの下で生活する訳であるが、組織内部では一切、組織名で呼ばれるべきである。しかし、市民社会に於いて、相互に訪問したり、電話連絡したりする場合は、組織名と本名とを厳密に使い分けねばならない。それは、相当の時間と訓練を積まなくてはならないが、それができていないと、戦闘時に往々にしてヘマをやってしまう。戦闘時に本名を呼び合い、それが敵に知れた場合、それは裏切りと同等の罪に値する。

◎　内部通信、連絡は、すべて符牒を使用すべきである。電話、手紙などで、最悪のアクシデントを想定せずに、だれにでもわかるやり方で連絡し合うのは絶対にまずい。従って、あらかじめ組織内部で符牒を設定、確認し合う必要がある。

3　武器、弾薬、闘争資金の獲得、捻出

◎　武器弾薬、闘争資金は、自らで製造、獲得するのが鉄則である。"狼"の場合は、特に思想的にこの点を最重要視している。断じて他人に依拠してはならない。これらを自ら製造、獲得、捻出するのが、われわれの武闘の開始に他ならないのだ。なお、闘争資金の問題であるが、"狼"は強制収奪を否定しない。だが、やり方と狙う対象は、充分検討した上でなければならないと考えている。以前、どこかのグループがやっていた辻強盗、ひったくりに関しては否定せざるを得ない。

4　訓練と兵士の補充

◎　訓練は、具体的な日程にのぼった闘争を照準に入れて行うだけではなくて、定期的にも行うべきである。戦闘に必要な全ゆる力を獲得するものであり、日常活動の成果を一つ一つ点検する役目をも持つ。即ち、訓練の中で、個々の任務の成果を全体にゆきわたらせ、その任務を、火急の際には他の兵士に引き継ぐ効果も持つものである。訓練の過小評価は、敗北につながる。

"狼"は、あらゆる機会を活用して訓練を行なっている。だが、それを行なう過程で、場所を探すのに大変苦労してきた。従って、訓練場所の選定も難しい問題である。大菩薩峠の敗北を想い起さなくては

ならない。

◎　ゲリラ組織は、兵士の数の多少にこだわる必要はない。少人数でも計画と訓練がゆきとどいていれば、大胆に鋭く闘いきれる。多人数必ずしもその組織の力の反映ではないのである。従って「水増し」は絶対に避けなくてはならない。これも敗北につながるものである。

◎　われわれは人間関係を限定し、合法的左翼との関係を絶っている。それでもなお、われわれは新たなゲリラ兵士を迎え入れることができる。その可能性は、われわれの武装闘争に依って生まれる。

◎　新規のゲリラ兵士との実際の結合は、時間をかけて、相互に点検し合い、訓練を終了した後勝ち取るべきである。デモへの呼びかけをするのとは訳が違うのだから、慎重に構えるべきである。そして新規のゲリラ兵士を鍛える最良の方法は、討論でも、研究・認識作業でもなく、もっぱら武装闘争を共に闘うことである。そしてその闘いを組織し、勝ち抜くことに依って、新規兵士と古参兵士のギャップを埋め、相互の信頼関係を強固にすることができる。

以上で、武装＝都市ゲリラ組織の基本的形態や維持に関して、大体の基本線を確認できたと考える。主要に見てきたものは、大きな組織についてというよりは、小さな組織についてであった。大きな組織に関していえば、それは、それぞれ独立した小隊とか班とかに依って形成されるべきであり、初めからピラミッド方式とかアルジエ方式とかで頭を悩ます必要はないのだ。都市ゲリラ戦に於いて有効なのは、少数の兵士に依る独立した小隊や班の動きである。班と班、小隊と小隊との関係・連絡は、個々の兵士の間に於ける関係・連絡と同様のものを原則とする。

“狼”は、政治綱領を決めて、それを前提に押したてて結集した組織ではない。ヘルメットと鉄パイプで「武装」し、政策阻止闘争を「闘い」、状況を変えて革命に至らしめようとしたわれわれの思考パターンを簡単に蹴散らし、思考を決定的に逆転させたのは、日帝の反革命史と、アイヌ・沖縄・朝鮮・台湾人民の反日帝革命史の確認であった。“狼”は、日本人革命者として何よりも先ず最初に闘い抜かなくてはならないのは、日帝の歴史、日帝の構造総体に対して“おとしまえをつける”ことであると確信している。

従って、武装に関しても、石つぶてから角材、角材よりは鉄パイプと火炎ビン、それでもまだ機動隊には勝てないから手投げ爆弾というような思考か

ら取り組んだのではない。唯一、一人一人の思想性が、武装を追求した結果なのである。そうであるが故に、"狼"は一人一人の思想性にこそ依拠した武装組織であり、一人一人の思想性のみが、結束と、闘いの更なる深化を保証しているのである。

"狼"は既に東アジア反日武装戦線に志願し、その一翼を担っている。反日武装闘争を闘おうと決意している、小隊から大きな軍隊までを含めてすべての武闘派に、"狼"と共に東アジア反日武装戦線に合流し、共に闘うことを呼びかけたいと思う。

第3篇
技　　術

武装闘争に必要な技術と一口に言っても、それは実に多方面にわたっていて、われわれが経験してきたこと、また知り得たことは極く初歩的なものだということができよう。けれども初歩的だからこそ、これを充分に習得し、訓練を積み重ねることは、武闘派同志諸君にとって欠かすことのできない重要性を持っている。武装闘争の戦術は、われわれの置かれている条件を無視して考えれば、様々な方法を取ることができる。しかしわれわれは夢想家ではないし、まして、生命も何もかもなげうって一つのことに向かおうとするのだから、慎重に、確実に敵を射ち、完全に打倒することを考えねばならない。

このことを念頭に置いて、以下詳述する「技術篇」さらに「展開」を読んで頂きたい。ただし具体的に指示した数量、寸法、形状などは、経験的につかんだ実用範囲であり、必ずしも絶対的な、これしかないというようなものではない。

1　火薬

1　火薬について知ることは武装の基本である。

2　われわれの、火薬の使用目的は、
◎　爆破
◎　対人殺傷用爆弾の装薬
◎　信管（起爆用装薬）
◎　弾丸、砲弾の発射薬
◎　その他

3　火薬の入手

◎　混合火薬の自家製造

◎　ニトロ化合物などの自家製造

◎　火薬庫などからの奪取

◎　銃砲店からの合法的購入

（注）

1）　現在最も入手が簡単な材料は除草剤（塩素酸ナトリウム―$NaClO_3$）で、商品名＝クサトール、クロレートソーダ、デゾレート、である。
季節（5～8月）と地域（農業）を選べば、一応使用目的等を聞かれるにしても、入手することは難かしいことではない。いきなりぶっつけに店に入らず、店の様子や周囲の状況等をつかんだ上で店に入り、用件を切り出すこと。なお、どんなことを聞かれてもよどみなく言えるよう話を作って、練習しておくとよい。

2）　混合火薬を作るのに特殊な器具はいらない。ただし乳ばちは、画材店等で大型のものを購入しておく方がよい。

3）　最初はあれこれ試みずに、黒色火薬（塩素酸カリウム、塩素酸ナトリウム、硝石等の主剤＝75%、木炭（試薬または工業用活性炭でもよい）＝15%、硫黄＝10%）が安全で威力もあるので、これから始める方がよい。詳しい製造法については「バラの詩」等に詳しく書かれているのでここでは省略する。なお、製造上の注意点を若干記すと次の様になる。

①　はかりは、てんびんばかり等の精度的に信頼できるものを使うこと。ヘルスメーター等は使わないこと。
②　容器、スプーン等の直接薬品に触れる器具類は、すべて非金属製のものを使用すること。
③　乳ばちは、三つの薬品について、それぞれ一つずつ別々に用意すること。
④　消火器等で万一の時の用意をすること。
⑤　雨天の日の製造は、湿気のことを考えて避けること。

⑥ 混合比は、すべて重量比であるから注意すること。なお、計量の際1％未満については神経質になる必要はない。

⑦ 木炭、砂糖は、できるだけ細かくすりつぶし、粒の大きさも平均にすること。

⑧ 硫黄は均一に混ざりにくいので、たとえば木炭を50ｇずつに分け、この50ｇに対して、50×10／15＝33ｇずつを加えてよく混合し、その後主剤を加える方法を取ればよい。なお一般的に、総量分を一度に混合するようなやり方では均一に混合できないので、数百グラムずつに分けて混合する方法が望ましい。

⑨ 混合した火薬を、乳ばちの中ですりつぶしてはならない。

黒色火薬以外の火薬の製造方法についても「バラの詩」等に譲る。

4） 塩素酸ナトリウムを使った火薬は、非常に早く湿気を吸い、使いものにならなくなりやすいので、保管に注意する。

5） 木炭が間に合わない時は砂糖で代用できるが、威力を引き出すためには容器（弾体）を強力に作る必要がある。混合比は主剤＝60％、砂糖＝30％、硫黄＝10％。混合方法は木炭と同じ。

6） 組織的力量によっては、火薬庫から奪取することができる。しかし71年の暮れあたりから、すべての火薬庫が電子装置による警戒―サイレン及び、現場事務所、警察署への非常ベル、が法的に強制されて、72年度内に完備した模様なので、極く短期的に設置される小量火薬庫の例外を除いて、固定された火薬庫をおそうには、綿密な作戦と機動力、武装、が必要だと考えるべきである。

2　起爆装置

起爆装置の構成要素（時限式の場合）

◎　発火装置　＞雷管部
◎　装　　薬
◎　時　　計　＞時限装置
◎　電　　源

A　電気雷管　　起爆用装薬を省いた発火装置のみの手製電気雷管の作り方。
（ＴＮＴ、ダイナマイト等の起爆には使用できない。）

★　用意するもの　★

1　ガス点火用ヒーター（2.5Ｖ用）
2　ビニール被覆線（細めて黒と黄色）
3　絶縁用ビニールテープ（普通に用いる幅20mmのもの）
4　はんだごて（20Ｗぐらいて、こての部分の細いもの）
5　はんだ（やに入り）
6　ペースト（はんだ用フラックス）
7　細目の小型やすり、紙やすり
8　ラジオペンチ（ペンチ、ニッパー兼用の工具）
9　シンナーかアルコール、ベンジン等
10　セロテープ（幅20mm）
11　硫黄と塩素酸カリウム（硝石でもよい）を１：１で混合したものを一つまみ
12　ぼろ切れ
13　電池（1.5Ｖ）２本

★　手順　★

（1）　ビニール線の被覆をラジオペンチでむき、下図の長さにする。

（むいた線はより合わせておく）

（2）　ヒーターのねじ部をシンナー等でふき、（1）の線を巻きつける。

（3）　はんだごての先端をやすりでよく磨き、電源を入れて加熱する。

（4）　こて先にはんだを押し付け、はんだが溶けて銀色に輝けば頃度よい温度である。ねずみ色に酸化するのは過熱状態。電源を切って、適温に常に保つこと。

（5）　（2）で巻きつけた線にこてを押し付け、被覆のビニールが溶けない程度に加熱したところではんだを押し付け、はんだづけする。この要領は最初は難かしい。うまくつかない場合は、フラックスをマッチ棒等で少量ぬりつけて後行なえばうまくつく。

（6） しっかりついたかどうか、線を軽く引っぱって確かめる。汚れはシンナー等で落し、極端な出っぱりがあれば、やすりで落す。

（7） 残りの線（3㎜）部に、（5）の要領ではんだをのせる。

（8） これをヒーターの尻の部分に合わせ、こてを押し付けると、はんだが再び溶けてはんだづけされる。この作業は手早く行なわないと、ヒーター内部のはんだづけがはずれて、ヒーター自体がだめになることがある。

（9） （6）の作業を繰り返した後、ビニールテープを巻く。そして、電池を使って試験する。

（10） ヒーター部にセロテープをぐるりと2周程巻きつけ、筒型にする。

(11)　混合した火薬を少しずつ上から入れる。ビニールで巻いた根本部を指で軽くはじきながらつめ、絶対に棒などで押し込まないこと。

(12)　口のところまでつまったら、セロテープ外周についた火薬をぼろなどできれいにぬぐい、もう一度セロテープを今度はぐるぐる巻きに、5～6回巻きつける。

(13)　これで完成である。実験の要領は次項に記す。

B　時限装置　　どこでも入手できるトラベルウオッチのめざまし機構を使って、タイムスイッチに改造する。

★　用意するもの　★

1　トラベルウオッチ
2　ビニール被覆線（細めのもの、黒、黄、1mぐらい）
3　銅板（0.2㎜厚ぐらいの薄いもの。なければできるだけ薄いブリキ板などで、はんだづけ可能なもの、10㎜角）
4　接着剤（非電導性で、金属の接着ができるもの。瞬間接着剤の方が早くて便利）
5　はさみ
6　ラジオペンチ
7　ドライバー（時計の分解作業の為だから精密ドライバーがよい）
8　やすり、紙やすり（目の細かいもの）
9　はんだごて（先の細いもの）
10　やに入りはんだ、ペースト
11　シンナーまたはベンジン、アルコール
12　ぼろ切れ
13　ビニールテープ
14　ドリル（ハンドドリル、電気ドリル）刃は径2㎜、金属用
15　電池（単3電池2本）
16　ピンセット

★　手順　★

（1）　時計の分解。ドライバーを使って、まず外側ケースから、時計部をはずす。普通、蝶番でねじ止めされているので、ねじをはずすだけでよい。（以後はずしたねじ類は、箱に収めてなくさない様に気をつけ、またそのはずした部位を記憶しておくこと。）

（2） 時計部裏ぶたをはずす。その前に色々なつまみをはずすが、ねじ込みされたつまみは、作動の逆回転（矢印のしてある方向と逆）。ただの押し込み式は、引っ張ればはずれる。たまに、止め金を使ったつまみがあるが、細いドライバー等で、こわさない様注意してこじればはずれる。いずれの場合でも、無理矢理はずそうとしないこと。取付け方法をよく確かめれば、はずすのは難かしくはない。

（3） 裏ぶたがはずれたら、はずしたつまみをもとに戻す。横から水平に見透しながら、めざましの時間を合わすつまみをゆっくり回してみると、文字盤の短針と、めざましの針が重なる時、カチッと音がして上下する板ばねがあるから、それをみつける。この板ばねは2つのギアを押しつけていて、短針のギアのつめと、めざまし針ギアの穴が重なると、2枚のギアがくっつく。板ばねの先は、ベルを鳴らすハンマーのストッパーになっていて、このストッパーが下方に下がることでハンマーが開放され、ベルを鳴らす。

原理としては、この板ばねをスイッチの電極として改造すると考えてよい。

（4） 黒線の先端を10㎜ほどむき、時計本体にはんだづけする。スプリング基部が固定されている基板①を文字盤うらにとりつけているネジ②をさがす。時計の構造は普通2枚の基板の間にぜんまいやギアをつめ込んで、それを文字盤うらにねじ止めしてある。このネジ②をゆるめて線を巻きつけ、しめつけた後、はんだづけする。

（5） 板ばね先端部にあたる文字盤うらに、接着剤をつけ固める。これは電極を取り付ける際の絶縁とベースを兼ねる。

（6） 板ばね先端の幅と同じに銅板を切り、電極を作る。伸ばした状態での全長は10㎜ぐらい。

（7）　これに黄線をはんだづけする。

（8）　この電極を接着剤で文字盤うら（5）のベースに取り付ける。2極の間隔を調節する。基準＝1mm。めざましのつまみを回して板ばねを上下させ、接触＝開閉の具合をよくみて調節すること。

（9）　（2）ではずした裏ぶたをはめる。その前に2本の線が具合よく外に引き出せるように、裏ぶた側面にドリルで穴をあける。

（10）　つまみ類を取り付けたならば、試験を行なう。

―例―

a) まだつかない　b) 重なるとランプが点燈　c) ランプが消える

(注意)　b)c)の間の時間間隔が30分以上ある＝なかなかランプが消えない時は、2電極の間隔が近すぎるのが原因で、調節が必要。15分前後を目安に調整すること。

(11)　(1)ではずしたケースに本体を戻す。

(12)　電源用の電池をはんだづけする。これは実際に爆破等に使う場合は、決行直前につくる方が、自然放電を防ぐ為にもよい。

(13)　配線

(14)　実験　　電気雷管を深い金属のかんの底に置き、実際にセット
　　　　　　　してみる。（1時間後ぐらい）

（注意）　できるだけ屋外で行なう。多小の音と発煙を伴うので、室内、
　　　　屋外を問わず配慮すること。特に、硝煙臭に注意。かんの周囲
　　　　1 m 以内に可燃物をおかないこと。消火水も用意すること。

第2章

展　　開

第１章で、武装闘争を始める為の最低限の準備について述べた。もちろんこれは最初の第一歩であって、“軍事の技術”という点ではあくまで入門編であり、技術的訓練の第一課程なのだ、という風に考えてほしいと思う。

火薬、雷管、時計。この３つの要素を完全に習得すれば、相当強力な爆発物を作ることができる。しかし、ひとつひとつの作戦に必要な爆弾として充分な条件を備えているものを作ることができるのかどうか。言い換えれば、威力（効果）、重量（大きさ）、時限可能範囲（12時間以内）とそれにプラスアルフファを加えた４つの要素が、作戦上のものと、実際作ったものとぴったり一致させられるかどうか。あるいはまた、どの様にしてその不足をカバーするのか。この重大で困難極まる問題については、それぞれの特殊性を考えれば、万能処方などという便利なものはない。この章で扱おうとする内容は、そういうやっかいな問題をかかえているわけで、この章をいかに正確に読みとり実践に適用していくかは、読者である兵士諸君の研究心と経験の積み重ねにかかっているといえよう。

第１篇

爆　　破

火薬などの爆発は、爆風、衝激波、高圧高熱ガス、破砕片の激突などの巨大なエネルギーを生じさせる。われわれはこのエネルギーを利用して何等かの目的を達しようとするのである以上、この"爆発"のメカニズムについて理解しなければ、有効に爆弾を使いこなすことはできないだろう。

ここでいま説明の都合上、火薬と爆薬という２つの系統に分けて考えてみると、一般的に次のように考えてよいと思われる。なおここでいう雷管とは起爆用の添装薬をもったもの（工業用雷管等）である。

火薬……雷管がなくても爆発させられるが、強力な容器（弾体）に密閉しなければならない。

爆薬……雷管を使わないと爆発しないが、特に強力な容器を必要とはしない。

つまり、爆薬（例、ＴＮＴ、ダイナマイト等）は雷管があれば、容器など関係なく爆発するが、火薬（黒色火薬等）は、特別な場合を除いて強力な容器を必要とする。（特別な場合とは、雷管装着、あるいは鋭感剤を加えてあるような場合。）特に第１章第３篇で述べた、砂糖で代用した火薬などは、木炭と比較して燃焼速度がゆるやかなので、大量に、強力な容器に入れなければ威力は引き出せない。

それでは、容器（弾体）の問題も含めて実際的な問題にふれよう。以下箇条書きで記す。

1　火薬および爆弾は、できるだけ使用直前に作り、長期保存はしないこと。

2　砂糖で代用した火薬は５Kg単位ぐらいで使わないと威力は望めない。塩素酸カリウムを主剤にした火薬、爆薬を混合し併用するならば、より良い

結果を引き出し得る。

「威力」とは非常に漠然とした言葉である。一応ここでは、対象は一般的なコンクリート、金属等の構造物と考えてよい。なお対人殺傷用で、確実にその人間に接近して爆発させられる場合は、この十分の一程度でよい。

3　それ自体で容器とみなせるような場所に仕掛ける場合 ――コンクリートの穴、土中等の場合は、容器を特に強力にする必要はない。それ以外の場所ならば必ず強い容器につめる。

閉塞された場所――マンホール、小部屋、自動車内、冷蔵庫内等では、開放された場所――屋外等より破壊力は大きい。従って同じ仕掛けるならば、閉塞された場所を選ぶ。

4　カモフラージュする場合は、同時に容器も補強される方法をとる方がよい。

5　容器の材質は鋼鉄が最上。その他、鋳鉄、青銅、黄銅、銅、アルミ、鉛、厚手の陶器、ガラス、コンクリート等。

6　理想的な形状は、1ボンベ状、2管状、3角柱状の順である。

7　火薬をつめる口はネジ状（1、2）が良いが、厚めのふたをして、横からネジ、ピン等で止めてもよい（3）。

8　肉の厚さは、鋼鉄の場合で2㎜以上。その他の材質の場合はもっと厚くする。

9　何本かのパイプ等に別々に火薬をつめてたばね、起爆するのはひとつだ

け、というようなやり方をしても、１本の薬量が100ｇや200ｇでは誘爆しないことが多い。必ず容器は単一にすること。

10　火薬をつめる口の反対側の端部も、ねじ、溶接等で完全にふさぐこと。それ以外の方法としては、ガスバーナー等で赤くなるまで焼いてハンマーでたたきつぶし、火薬ガスがもれない様に鉛などをつめてもよい。鉛は鉄なべで、ガスにかけて溶かす。

電気雷管等を引き出す為に、ふた、管部などにあけた小穴は特にふさがなくてもよいが、火薬は一般的には湿気を極端にきらうので、接着剤等でふさいでおけば安全である。

ビニール袋等で、火薬と管内壁とは隔離する

接着剤

端部はクッションとしてゴム粘土、あるいは布、紙などをつめる

(小型爆弾の代表的構造図)

11　容器の補強の例

針金をびっしりコイル状に何重にも巻き、強力な接着剤で固定する。

大小容器を重ねて使う　　コンクリートづめ

12　一般的に、両端部は弱いので十分補強し、ねじの場合、ねじ部は大きくとる。それができない時は、仕掛ける時、端部が床やかべに押し付けられるように置く。

13　タイマー部（時計＋電池）と爆弾は仕掛ける直前に結合し、できればその前に豆電球等を使って安全を確かめる時間的余裕をもつ。

14　可能ならば、爆弾は、重石（おもし）、かすがい、太い針金、ロープ等で対象に固定する。

15　置く場所が、土、砂利、板張り等の弱いところでコンクリートべいなどを爆破する場合、下に厚い鉄板、石などを置けば力の分散を防ぐことができる。

16　対象に接している部分以外はできるだけ重くてしっかりしたものでおおうとよい。

17　時計は爆弾に近接密着させておかないと、まるまる証拠を残すことになる。

18　爆弾を２個以上極く近接した場所に仕掛けるのは難かしいが、もしやむを得ず仕掛ける場合、タイマーは一つで併用し、爆弾は並列に接続する。また、コードの延長による電気抵抗があるので、電池を増して電圧を上げ、全部の雷管が同時に発火するように、調整し実験を行なうこと。この場合も、前項17を守ること。

19　通常一つの爆弾に雷管は一つでよいが、雷管自体の不良という可能性を考えると、２個並列につけて不発を防ぐのもよい。

20　不発の場合、分解して指紋検出される場合があるので、あらゆる材料に指紋を残してはならない。作る時、材料に直接手を触れないように手袋で扱えばよいのだが、それができなかった時は、組立て時にシンナー等でふき取る。

21　金属材料を扱う工具について参考までに述べれば、

◎　電気ドリル…………１万円前後である。チャック能力（穴あけ能力）が6.5mm以上のものがよい。スタンドをつけて卓上ボール盤型になるものもある。

◎　グラインダー………１万５千円前後のものがよい。用途は広い。

◎　やすり………………目＝荒、中、細、油目／型＝平、丸、半丸 ｝等多種ある

◎　万力（バイス）……万能型ホームバイス、一般工作用箱万力等がある。口が100mmぐらいの大型の方が用途は広い。

◎　タップとダイスおよび回し工具……オネジ、メネジを切る工具。

◎　ガストーチ…………パイプを赤めたり、はんだづけ、鉛を溶かす等に使える。ガソリン使用のものだが、ブタンガスを使う便利なものもある。

◎　パイプレンチ………パイプのねじを締めつけるための工具。

第2篇

作戦の一般的原則

1　作戦の準備について

◎　爆弾を使う作戦の準備には、早くて1ヶ月、こみいった作戦や、経験の少ない部隊の場合は数ヶ月を要するものと考えてよい。それ故、情勢に敏感に対応した作戦を展開する為には、あらかじめ攻撃対象、攻撃方法を想定して準備を進めておく必要がある。そうすれば準備不足の危険をおかすこともなく、情勢に即応した作戦を展開することも決して不可能ではない。

◎　作戦準備の3つの要素をあげると次の様になる。

A　調査
B　爆弾の製造
C　作戦計画と訓練

A　調査

（1）　攻撃の対象をとりまく条件について。（警備、交通など全般的なもの）
（2）　破壊あるいは殺傷、放火を効果的に引き出せる条件について。（構造、移動、などの科学的検討）
（3）　自分達の組織（あるいは個人）の力量とのかねあいて選択すべき条件について。（おおまかな作戦計画と実際の条件と比較検討）
（4）　その他。

B　爆弾の製造

（1）　威力と形状の決定。
（2）　不足材料の入手。
（3）　製造場所の確保。

（4） 必要に応じた実験。

（5） 製造後の保管。それに伴う運搬。

（6） その他。

C 作戦計画と訓練

（1） 作戦に加わる兵士の員数、志気、能力の確認と点検。

（2） 作戦決定のプロセス――決定のプロセスとしては、まず退路をいかに確保するかということに重点をおいてたてるべきである。絶対に退路をあいまいにしてはならない。

（3） 計画書は2部以上作成しない。

（4） 計画書および保存用以外の資料は、作戦直前の最終確認後焼却する。

（5） 能力以上の無理矢理な作戦はたてるべきではない。

（6） 作戦中の行動隊長をおく方がよい。（行動隊長は作戦中の指揮権を持つ）

（7） 作戦の手直しを直前に行なってはならない。また参加者全員の承諾と確認なしに行なってはならない。

（8） 作戦後の情報収集、情報交換の方法は、あらかじめ決定し準備しておく。

（9） 爆発前に発見されたり、不発だったり、予定外の結果が生じた場合の基本方針は決定しておく。具体策も事前に準備しておく。

（10） 事前事後に警告を発したり、宣言を発表したりする戦術上の動きには、特に周到な準備と配慮、慎重な行動が要求される。

（11） 公共交通機関以外の車両、特に自家用自動車の使用には注意をはらうこと。作戦上どうしても必要な時以外は使用を避けるべきである。やむをえず使う場合でも、ナンバープレート、ボディカラー等を工作して万全を期すこと。兵士、爆弾等の単純な輸送に用いる場合で、作戦地域に近づいたならば他の輸送手段に切り替えるような場合はこの限りでない。

（12） 自動車を使う場合、交通渋滞の可能性を忘れてはならない。

（13） ナイフ、銃などで武装する場合、やむをえずそれを使用したことで、全く予想外の状況が起こり得る。武装の可否は、現在の状況の中では慎重に検討すべき問題である。積極的、攻撃的にその武器を使用するような作戦以外では、所持は避けた方が無難とも

言える。しかしこの問題については、一般論としてでなく、運動の方向性として更に深く考えねばならない問題であるから、判断は読者にゆだねる以外にない。

(14)　変装、疑装を原則とする。

(15)　爆破、殺傷の対象を限定し、無用な巻きぞえなどの犠牲を出さない様に作戦上配慮しなければならない。

(訓練)

(16)　訓練を可能な限り行なう。

(17)　爆弾を仕掛ける動作、タイマーを結合する動作、などはその任務を負った兵士が無意識に動けるまで訓練する。なぜならば、この動作は非常に短時間のうちに警戒の目をぬって行なう必要があるし、暴発の心配もある、最も危険性の高い瞬間だからだ。

(18)　不発、暴発を避ける為には、あらゆる可能性を考えて実験、訓練を繰り返すことと、爆弾を、その構成要素のひとつひとつについて念入りに製作、試験する以外にない。

2　作戦行動における注意

(1)　作戦地域には、直前直後は近づかない。

(2)　ちり紙から切符、たばこに至るまで指紋残留をしない。

(3)　作戦に関係ある話題、ニュースについて、「他人との会話」に絶対に出さない。

(4)　作戦地域で作戦行動中に店で飲食するのは、あらかじめ作戦に組まれている時間調整等以外にはしてはならない。

(5)　人に道や時間を聞くような馬鹿なまねをしないこと。

(6)　作戦中の服装、持ち物の数量チエックは厳重に行なう。特に手袋、めがね、ペン、たばこ、マッチ等を落としたり、忘れたりしやすい。作戦に不要なものは絶対に所持しない。

3　総括的な注意

（1）　爆弾の最終チエック、作戦の打ち合わせ、人員の配置、輸送に関する手配、必要な訓練、等の準備をすべて終えたならば、数日間の待機期間をとれるようにスケジュールが組まれていること。

（2）　兵士の精神的動揺や、組織的矛盾などが、準備期間に現れることが多い。その場合、当然それを克服するべく努力することが必要だが、余りに全体的、組織的なガタつきがある場合、特に、思想的対立等が生じた場合は、中止ないし延期すべきであると思われる。

（3）　作戦遂行中、偶発的、突発的な支障が生じた場合、あくまで計画を完遂する立場で処理すべきであり、兵士個人が中途で自己の意志で中止するべきでない。なぜなら、実際の作戦においては相互に連絡不可能な場合が多く、作戦の勝手な中断は、他の任務を遂行中の兵士を窮地におとしいれるかもしれないし、運動全体にとって大きなマイナスになるかもしれないからである。

◎　本書の持ち歩き、および保管には十分注意すること。
◎　本書の増し刷り、海賊版を作る場合には、ミスプリントのないように十分注意すること。

続編予告

◎　最近の国内の爆弾闘争の概括
◎　電気部品、工具、機械、材料その他の知識
◎　モデルガンの改造と手製実包の製造
◎　火薬庫の盗難防止装置について
◎　塩素酸カリウムの製造
◎　トリック爆弾の製造（小包、手紙爆弾など）
◎　"狼"式手投爆弾の製造

兵士読本　Vol.1

1974年　3月1日　発行
領価　100円

編集　東アジア反日武装戦線"狼"兵士読本編纂委員会
発行　東アジア反日武装戦線"狼"情報部情宣局
印刷　東アジア反日武装戦線"狼"情報部印刷局

創造
千寬宇·吉玄謨 對談 4·19
특집·中國大陸의 政治와哲學
김지하 長詩·蜚語
4
創造
千寬宇·吉玄謨 對談 4·19
특집·中國大陸의 政治와哲學
4
¥100